

## シカゴ万国博覧会における二人の女性： Ellen Swallow Richards & Mary Stevenson Cassatt

楠 幹 江

Two Women at the World's Columbian Exposition of Chicago in 1893:  
Ellen Swallow Richards and Mary Stevenson Cassatt

Mikie KUSUNOKI

### 要 旨

公衆の教育を主たる目的とするシカゴ万国博覧会において、エレン・スワロー・リチャーズとメアリー・スティーヴンソン・カサットは、女性達への自立の啓蒙を行うために、メッセージを発信した。リチャーズは、健康な生活を科学的な手法で推進するための女性の役割を、ランフォード・キッチンという具体的な展示で示した。カサットは、新しい女性の生き方を女性館の壁画を製作するという手段で提示した。

わずか2歳しか変わらない2人の女性の生き方は、女性解放運動という流れの中では、異なった路線を歩んだ（リチャーズは、男女分離主義に反対する家庭派フェミニストであり、カサットは、女権拡張を主張するフェミニストであった）が、リチャーズは、家政学を確立し、カサットは女流画家の活躍の道筋を開いた。主義・主張は異なっていたが、2人は、女性の自立という点では、同じ方向を向いていた。

キーワード：エレン・スワロー・リチャーズ、メアリー・スティーヴンソン・カサット、シカゴ万国博覧会、女性教育、女性館

### 1. は じ め に

シカゴ万国博覧会（以下、シカゴ万博と略す）は、1893年5月1日から10月3日まで、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴで開催された。コロンブスによる新大陸発見400周年を記念して開かれた万国博覧会であったため、シカゴ・コロンブス万国博覧会とも呼ばれている。会場は、シカゴ郊外のミシガン湖畔の公園を中心とする湿地帯を造成した約700エーカーの土地で、設計はセントラル・パークを手がけた造園技師のフレデリック・ロー・オルムステッドが担った。このシカゴ万博は、19世紀中にアメリカ合衆国で開催された博覧会において最も規模が大きく、参加国は46ヶ国であり、当時のアメリカ合衆国内の人口の約半数となるおよそ2700万人が来場している。

シカゴ万博の特徴は、アメリカの技術力を誇示するため電気が多用された点と、女性の企画運営による「女性館」が設置された点であるといわれている<sup>1),2)</sup>。中でも、女性館は、マサチュー

セツ工科大学（以下、MITと略す）建築学科の初の女性卒業生である建築家ソフィア・ヘイデン・ベネットが設計しており、非常に注目を集めた。

このシカゴ万博に、女性史の歴史上重要な役割を演じた2人の女性が参加している。1人は、家政学を確立したエレン・スワロー・リチャーズ（1842～1911）であり、もう1人は母子像で名高い画家・版画家のメアリー・ステイーヴンソン・カサット（1844～1926）である。リチャーズは、マサチューセッツ州の展示館においてランフォード・キッチンを出展し、カサットは女性館の壁画を製作した。

彼女達が活躍した19世紀末のアメリカは、産業革命の波が押し寄せ、それに付随して、男性の領域としての社会、女性の領域としての家庭という、領域分離に基づいた社会システムが形成された時代である。植民地時代は、家と仕事場との境目がなく、男性が主導権を握る世界が存在するだけであったが、産業革命後は家と仕事場が切り離され、そこに家庭という女性が主導権を握る領域が成立した<sup>3)</sup>。そしてこの領域分離のイデオロギーを強化すべく、女性と家庭の繋がりを自然化するイメージが流通するようになった。他方、領域分離のイデオロギーに抗する女性達も登場した。参政権論者やニューウーマンと呼ばれた女性達である<sup>4)</sup>。彼女達は、個人的・社会的・経済的に自立し、自分で行動する新しいタイプの女性達であった。

リチャーズは、領域分離を前提としつつ、炊事、洗濯、掃除といった家事の科学化、専門化、能率化を探求し、その活動を通して、家事改革のみならず社会改革をも行った家庭派フェミニストであった。一方、カサットは、参政権を求めて、また、経済的な自立を求めて、画家という男性の領域に踏み込んだフェミニストであった。

女性の新しい生き方が模索されたこの時代、シカゴ博覧会におけるリチャーズとカサットの役割を考察した。

## 2. エレン・リチャーズとランフォード・キッチン

アメリカ マサチューセッツ州 ジャマイカプレイン エリオットストリート32に1軒のイタリア風の家が現存する。この家は、エレン・リチャーズがMITの教授であったロバート・リチャーズと結婚直後から亡くなるまで暮らした家である。現在は、国立歴史的建造物に指定されており、建物の案内板には、つぎのような記述がなされている<sup>5)</sup>。

In 1870 Ellen Swallow Richards (1842-1911) was the first woman admitted to MIT. She was a woman pioneer in scientific education, and was one of the founders of the American Association of University Women. Her varied career included early studies in urban sanitation and industrial chemistry. She applied scientific inquiry to problems of daily home life, and is credited with starting the home economics movement in America.

1870年、Ellen Swallow Richards (1842-1911) はMITに入学した最初の女性であった。彼女は科学教育における女性のパイオニアであり、アメリカ大学女性協会の創設者の一人であった。彼女のさまざまなキャリアには、都市衛生と産業化学の初期の研究が含まれていた。彼女は日常生活の問題に科学的調査を適用し、アメリカの家政学運動を始めた人である。

この案内板に彼女の全生涯が語られている。リチャーズは、苦学をしながらMITで学び、MITで最初の女性教授になった人である。

## (1) 略歴

1842年12月3日、アメリカマサチューセッツ州の小さな田舎町で生まれた。

1871年、バツサー大学卒業後、MITに女性として初めて入学した。正式な入学ではなく、実験的な入学であったといわれている。MITに入学を認められた時の手紙<sup>6)</sup>が残されている。

静かな道を歩みたいと望んでいます。……私は過激派ではなく、また、女性が誤りを是正するためのすべての投票の結果をなんでも信ずる者でもないこと、女性の義務を軽蔑するのではなく、部屋を管理し、縫い物をするなどの特権を私が主張することが、何より強い味方を私に得させてくれています。

1873年、MITを卒業後、そのまま大学に残った。しかし、身分保障はなく無給であった。

1875年、MITの鉱山学科のロバート・リチャーズ教授と結婚した。リチャーズは化学を通して他の女性達に科学の読み書き能力を身につけさせ、それによって科学の家父長制の中に女性的な感受性を持ち込んだ。また、日常生活においては、生命の饗宴 (FEAST) が健康な生活を維持する不可欠なものであると述べ、実践した。生命の饗宴とは、食物 (Food)・運動 (Exercise)・娯楽 (Amusement)・睡眠 (Sleep)・仕事 (Task) である。

1876年、MITに女性研究所を創設し、自宅に消費者・家庭研究所を開いた。

1881年、大学女性卒業生協会を結成した。

1882年、『調理と洗濯の化学』、『無機物初級講座』を著した。

1886年、MIT衛生化学研究所が開設され、正式にMITの教員に任命された。無給の時代から数えて12年後のことであった。『食物材料と粗悪品』を著した。

1892年、エコロジーにおける人間主義を主張して、これまで行ってきた環境の科学を「エコロジー」と命名した。

1893年、世界博覧会で「ランフォード・キッチン」(後述)を出展した。

1898年、家庭科学を、ホーム・エコノミックスと名づけた。

1899年、後にアメリカ・ホーム・エコノミックス協会となるレイク・ブラシッド会議を指導した。『生活のコスト』を著した。その後、『食物のコスト』(1901)、『栄養計算機』(1902)、『食物と栄養』『正しい生活の技術』(1904)、『住居のコスト』(1905)、『日常生活の衛生』(1907)を著した。

1908年、ホーム・エコノミックス協会結成、初代会長に推される。『清潔さのコスト』を著した。

1908年、『優境学』を著した。スミス大学より理学博士号を授与された。

1911年、『衛生設備による保護』を著した。3月30日、死去、68歳であった。

前述したように、リチャーズは、領域分離のイデオロギーを受け入れ、女性の領域が家庭であることを前提とした思想を持っていた。彼女は、「女性の科学的知識の欠如が、家事を単調な骨折り仕事にしている原因である」ことを指摘し、家事の科学的な経営の必要性を訴えた。「家事は誰にでもこなせる雑用ではなく、化学、物理学、生理学などの諸科学に精通していなければできない科学である。」と断言している<sup>4)</sup>。

この家事の科学を、具体的な形で一般の人に提示し、実践したのが、ニューイングランド・キッチンであり、ランフォード・キッチンである。

## (2) ランフォード・キッチン

ランフォード・キッチンを展示する3年前の1890年、リチャーズはボストンにニューイングランド・キッチンを開設した。このキッチンの主な目的は、「低所得者層の人達に、安価な食品でも高価な食品同様に栄養を満たすことができることを、教育によって示す」ことであった。開設の運びとなったのは、①「労働者の食物と栄養についての徹底的な研究—特に強い飲酒の影響」に対して多額の寄付があり、その研究の責任者にリチャーズが選ばれたこと、②「中層及び下層家庭に適切な衛生的経済的調理法」に関する論文審査員にリチャーズが選ばれ、優秀論文の筆者を発掘したこと、③後に調理方法に大きな変化をもたらすことになるアラジン・オープン発明があったこと、の3つの幸運があったといわれている<sup>6),7),8)</sup>。

ニューイングランド・キッチンのメニューには、ビーフスープ、ビーフシチュー、オートミール、ライス・プディングなど、科学的に栄養価のバランスがとれた品目が並べられていた。販売方法は、テイクアウト方式であり、現在のファーストフードの先駆けであった。また、キッチンは、一般大衆への衛生教育のために、調理工程がわかるように、どの場所も開放された。清潔さについての現地レッスンを兼ねていたのである。

結果的に、このキッチンは、低価格で栄養のある食品の良さを貧しい人々に納得させる、という主目的は果たせなかった。なぜなら、低所得者層の人達の意識改革を行うことができなかったからである。すなわち、体に良いものに対する知識が不十分であったため、種々なメニューを理解してもらうことが困難だったからである。

しかし、この経験により、リチャーズは、食物の栄養価に関する一般的な公教育の必要性を確認した。そして、その実現性を目指して、ランフォード・キッチンを計画した。

シカゴ万博におけるランフォード・キッチンは、マサチューセッツ州の展示館として建築された小さな建物であった。当初、参政権論者達から、女性館（後述）への出展を依頼されたが、リチャーズは、きっぱりと断ったことが明らかになっている<sup>7)</sup>。参政権論者達とは一線を引いていたことがうかがえる。キッチンの内部は、化学実験室そのものであり、食物からは栄養を、燃料からは熱を最大限に引き出す工夫がなされていた。

ランフォード・キッチンは、たんぱく質・炭水化物・カロリーという用語の意味や、食品には栄養に基づいた科学的な原理があるという事実を、一般の人に説明した最初の試みであった<sup>8),9),10)</sup>。一般の人が、食品の組成や栄養価について、ほとんど何も知らなかった時代に、このキッチンの試みは、現在我々が一般教養の基礎とみなしている三つのR（Reading Writing Arithmetic 読み 書き 計算）のような新しい知識の基盤を栄養学の分野において築いた。

大成功を得たランフォード・キッチンであったが、リチャーズは、「家政学の諸分野の万遍な展示とはならず、調理・栄養学分野が突出していた」点を反省していたことが明らかとなっている<sup>10)</sup>。キッチンという名の下では、仕方がないと考えられるが、次のセントルイス万国博覧会（1904年）では、家政学の広範な分野の展示を行うことを決定している。実際に、セントルイス万博では、科学を日常生活に応用する可能性を検討するために、衣・食・住などの人間生活に関する広範囲な展示がなされた<sup>10)</sup>。

ニューイングランド・キッチンとランフォード・キッチンを提示した食生活における科学的実験は、その後、学校給食計画へと進み、ボストンを手始めとして、全米に拡大していった。このようリチャーズの試みは、家庭内の作業に止まらないで、環境全体をも包摂していくことになった。そして、彼女の思想は、優境学という新しい学問を誕生させた。優境学は優生学に見られ

る生物学的な決定論を拒否し、環境という外的要因を重視する学問である。環境改善のカギとなる場所は、環境の最小単位である家庭であり、カギとなる役割を担うのは女性である。このため、女性を教育する必要があるとし、家庭における科学を全米の子供に学ばせる運動を展開した<sup>6), 7), 8)</sup>。

### 3. メアリー・カサットと女性館

ボストン美術館に『オペラ座の黒衣の女（オペラ座にて）』（1879）という絵画がある<sup>11)</sup>。この絵画は、米国で初めて展示されたカサットの印象主義的画題の作品と考えられている。描かれているのは、オペラを鑑賞する女性であり、黒衣に身を包み、一心に舞台上へと視線を向けている姿である。また女性が左手で握り締める扇は固く閉じられており、女性の優美さや華やかさを演出する道具としては描かれていない。一方で、背景の棧敷席の男性は、舞台上ではなく、黒衣の女性へと視線を向けている。当時、パリのオペラ座は、ブルジョアの交流の場であり、女性は着飾り、男性は、その女性を目当てに訪れていたといわれている。この絵画では、男性から「見られる存在」である女性が、オペラを見る主体として描かれており、革新的な女性像を表現している。これは、カサットが、当時の男性社会への明らかな挑戦とオペラ鑑賞の場での男性への軽蔑を表現していると考えられている。

カサットの時代、女流画家達は、両親の許可を得なければ絵画の訓練を受けることはできなかった。また、成人後も絵画の訓練を続けるために、有名な画家のモデルの役割を進んで引き受けなければならなかった。カサットは、フェミニストであった。女性の平等の権利への率直な支持者であり、女性の選挙権の運動などを行った女性であった。その彼女が製作した女性館の壁画の意味を考えてみたい。

#### (1) 略歴

1844年5月22日、アメリカペンシルヴァニア州アリゲニー・シティ（現在のピッツバーグ）郊外に生まれた。裕福な家庭に生まれた彼女は、6歳から11歳まで、次兄の病気療養のため、家族とともにフランスやドイツに長期滞在し、ヨーロッパの文化や芸術を吸収した。

1861年～65年、ペンシルヴァニア美術アカデミーに入学し、絵を学んだ。

1866年、プロの画家になるため、パリに渡った。当時国立美術学校がパリにあったが、女性の入学は認めていなかった。このため、アカデミー画家のシャルル・シャブランの主催する女性の為の絵画教室に籍を置いて学んだ。

1868年、サロンに初入選した。

1870年、普仏戦争のため一時的にフィラデルフィアへ帰国した。

1871年、再びパリへ戻り、精力的にサロンへ出品し続けた。しかし、作品を正当に評価しないサロンに不満を持つ中、印象派の巨匠エドガー・ドガの作品からインスピレーションを受けて、革新的な絵画表現を目指すようになる。

1877年、ドガと知り合い、多大な影響を受けた。

1879年、ドガに招かれて印象派に加わった。

1892年～93年、シカゴ万博の女性館において、「現代の女性」をテーマにした壁画の制作に取り組み、新しい時代の女性像の表現を展開した（後述）。

1893年、デュラン＝リュエル画廊で開催された回顧展が高く評価され、パリの美術界で確固たる地位を築いた。

1904年、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を受章した。

1915年、女性参政権を求める運動支援のための展覧会に参画した。

1926年、6月14日、死去、82歳であった。

カサットは、多くの母子像を残している。その作品からは、優しい、穏やかな幸せな母と子の関係が想像される。カサット自身は、生涯独身をとおり、子供も家族も持たない人生をおくっている。彼女は、どのような想いで、母子像を描いたのであろうか。

カサットに関しては、単なる母子像や表面的に見える女性像を描いたわけではない、という意見もある<sup>12)</sup>。「女らしさの感情は、男性原理社会が女性達に強要してきた女らしさを無意識のうちに女性達が甘受していることによるものとし、カサットはそういう社会構造を批判した」という意見である。

## (2) 女性館

カサットは、シカゴ万博において、女性館の中央ホール「栄光のギャラリー」の南側壁画に『モダンウーマン』を製作した。残念ながら壁画はシカゴ万博後消失してしまっており、現在は行方不明である。しかし、数点の写真が残されており、それらから構図を読み取ることは可能である<sup>13)、14)</sup>。

女性館中央ホールの南北ティンパムを飾る2枚の壁画は、ボード・オブ・レディー・マネジャーズの委員長であったバーサ・バーマーの指示により、当時パリを本拠地に活動していた2人の女性画家、メアリー・フェアチャイルド・マクモニーズとメアリー・ステイーヴンソン・カサットが担当することとなった。主題は、「女性の進歩や向上」であり、2枚の壁画は、それぞれ、昔の女性と現代の女性を描くように指示された。カサットに割り当てられたのは、現代の女性、すなわち『モダンウーマン』であった。カサットは2年間でこの壁画製作プロジェクトを完成させている。この壁画は三連画形式であり、全体として、女性の権利を確立し、男性との関係を離れた女性のコミュニティを表現していた。中央の大きなパネルは、『知識の果実を収穫する若い女性』と名付けられ、10人の女性が果樹園で果実を収穫している姿が描かれている。10人の女性達の衣服は、同時代の平服で描かれ、壁画の中心ともなっている部分には、大人の女性から若い少女へとりんごが手渡されている構図となっている。知識という果実を収穫し、次世代に継承しているこのモチーフには、当然ながらカサットの強い意志が表現されている。『知識の果実を収穫する若い女性』の習作的作品として考えられている、ヴァージニア美術館所蔵の『林檎に手を伸ばす子供（林檎に手を伸ばす赤ん坊）』<sup>11)</sup> (1893年)を見ると、カサットの真意をより明確に読み取ることができる。母親は左手で女の子を抱きかかえ、右手で、子供にりんごをとらせようとしている。りんごは知識であり、このため、母親が子供に知識を授ける構図となっている。すなわち、女性が教育することによって、子供を自立させるという強い意志が描かれている。また、カーネギー美術館所蔵の『果実を摘む若い女性』<sup>15)</sup> も同様な解釈ができる。この絵は、2人の若い女性が描かれており、果実（りんごと思われる）を摘みながら何か真剣な話をしているように描かれている。果実という新しい知識を得ることによって、新しい生き方を考える様子が描かれていると解釈できる。これらの点から、シカゴ万博における『知識の果実を収穫する若い

女性』は、女性が女性を教育するという、新しい女性の象徴を表現していると考えることができる。

左端のパネルは、『名声を追求する少女達』と名付けられ、3人の少女達がカモに追いかかけられながら、ふんわりと空中を飛んでいる裸の人物を追いかけている構図となっている。裸の人物は、名声や栄誉を表現しており、少女達は、髪や衣服の乱れは気にしないで、競って名声を追っている。足元のカモは、彼女達を批判する大人を表現している。いつの時代にも見られる光景である。

右端のパネルは、『芸術・音楽・舞踊』と名付けられ、それぞれ、芸術、音楽、舞踊をあらわす3人の女性が描かれている。この壁画の特徴は、3人の女性が男性にインスピレーションを与えるミューズとしてではなく、また、男性に描かれているモデルでもなく、逆に表現する主体として描がられている。

カサットが書いたパーマーへの手紙が残されている<sup>14)</sup>。

私は当世風の現代的な女性を描こうとしています。細部にいたるまでできるだけ正確に今の時代の流行を表現しようと思います。知識や科学の果実を収穫する若い女性達を、中央の最も大きな構図の主題にしました……喜ばしい、ある盛大な祝祭日の一日のできごととして描こうと思います……両脇に二つ作品を置くスペース上の余裕があります。一つは、間もなくとりかかる予定ですが、名声を追求する少女たちという主題にしようと思います。私にとってこの主題はとても現代的なものに思われます……もうひとつのパネルは、芸術、音楽、舞踊を表現することになるでしょう。もちろんすべてが最も現代的に描かれるでしょう。

この壁画において特徴的な点は、『名声を追求する少女達』『知識の果実を収穫する若い女性』『芸術・音楽・舞踊』において、男性の姿が全く描かれていないことである。カサットは、男性との対比における女性を描くのではなく、主体的に行動し、互いに連携する新しい女性を表現している。

カサットの壁画は、当然ながら、マクモニーズの昔の女性、すなわち『プリミティブウーマン』と比較されたが、当時の評価は酷評ともいえるものであった<sup>14)</sup>。マクモニーズは、ブリーツのある古代の衣装を身に着けた女性達が水汲みや育児に携わっている姿を描き、労働に対する伝統的な男女の役割を提示した壁画を製作した。結果的に、多くの批評家達は、カサットの壁画を「失敗」とし、マクモニーズの壁画を「成功」とした。

しかし、このような批判に対して、擁護する意見もある。すなわち、「壁画の主題のもつわかりにくさや曖昧性にこそモダニティーがあった」とする意見である<sup>15)</sup>。女性館は、労働における男女平等や、参政権、女性の社会進出といった政治的な問題には直接的には関与していないという事実も、それを裏付けている。自立した女性の生き方を静かに模索するという主題を壁画に込めているのではないかと考える。

#### 4. お わ り に

国際博覧会条約による国際博覧会の定義は、「1. 国際博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう。2. 博覧会は、二以上の国が参加するものを、国際博覧会とする。3. 国際博覧会の参加者とは、当該国際博覧会に公式に参加している

国の陳列区域にあるその国の展示者、国際機関、当該国際博覧会に公式には参加していない国の展示者及び当該国際博覧会の規則により展示以外の活動特に場内営業を行うことを認められた者をいう。」とある。

公衆の教育を主たる目的とするシカゴ万博において、リチャーズとカサットは、女性達への自立の啓蒙を行うために、メッセージを発信した。リチャーズは、健康な生活を科学的な手法で推進するための女性の役割を、ランフォード・キッチンという具体的な展示で示した。カサットは、新しい女性の生き方を壁画という手段で提示した。

わずか2歳しか違わない2人の女性の生き方は、女性解放運動という流れの中では、異なった路線を歩んだ（リチャーズは、男女分離主義に反対する家庭派フェミニストであり、カサットは、女権拡張を主張するフェミニストであった）が、リチャーズは、家政学を確立し、カサットは女流画家の活躍の道筋を開いた。主義・主張は異なっていたが、2人は、シカゴ万博において、女性の自立という新しい生き方を提示したと考える。

#### 参 考 文 献

1. 岩本裕子. (1993) シカゴ万博(一八九三)と黒人女性. 駒沢史学, 45: 143-166
2. 味岡京子. (2006) 1893年シカゴ万国博覧会「女性館」への日本の出品「女性の芸術」をめぐって. お茶の水女子大学人間文化論叢, 9: 1-11
3. 栗原涼子. (2009) アメリカの第一波フェミニズム運動史. ドメス出版, 東京
4. 根本 治 監修. (2009) 国家・イデオロギー・レトリック—アメリカ文学再読. 南雲堂フェニックス, 東京
5. List of National Historic Landmarks in Boston.  
[https://en.wikipedia.org/wiki/List\\_of\\_National\\_Historic\\_Landmarks\\_in\\_Boston](https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_National_Historic_Landmarks_in_Boston) (確認日: 2018.9.12)
6. Caroline L. Hunt. (1942, 1958) THE LIFE OF ELLEN H. RICHARDS, American Home Economics Association, Virginia. [C. C. L. ハント(小木紀之・宮原佑弘 訳). (1980) エレン・H・リチャーズの生涯. 家政教育社, 東京]
7. Robert Clarke. (1973) ELLEN SWALLOW- The Woman Who Founded Ecology.  
[ロバート・クラーク(工藤秀明 訳). (1994) エコロジの誕生 エレン・スワローの生涯. 新評論, 東京]
8. Esther M. Douty. (1961) AMERICA'S FIRST WOMAN CHEMIST ELLEN Richards. Julian Messner, Inc. New York. [E. M. ダウティ(住田和子・鈴木哲也 訳). (2014) アメリカ最初の女性科学者 エレン・リチャーズ. ドメス出版, 東京]
9. 香川晴美. (2012) エレン・リチャーズの栄養教育の試み: シカゴ博「ランフォード・キッチン」. 山陽学園短期大学紀要, 43: 33-46
10. 柴 静子. (1995) メリカにおける家政教育の発展とE. H. リチャーズの役割: シカゴ万国博覧会でのランフォード・キッチンの展示を中心に. 教科教育学研究, 10: 15-28
11. 『林檎に手を伸ばす子供(林檎に手を伸ばす赤ん坊)』  
[http://www.salvastyle.com/menu\\_impressionism/cassatt.html](http://www.salvastyle.com/menu_impressionism/cassatt.html) (確認日: 2018.9.12)
12. 川田都樹子. (2016) メアリー・カサット作 母子像の解釈をめぐって: 人間科学専攻の学生たちとのある授業の記録として. 甲南大学紀要 文学編, 166: 125-136
13. 『モダンウーマン』  
<https://www.artpedia.jp/mary-cassatt/> (確認日: 2018.9.12)
14. 江崎聡子. (2003) 「新しい女性」の肖像: メアリー・カサットによるシカゴ万博女性館の壁画『モダンウーマン』. アメリカ太平洋研究, 3: 98-114
15. 『果実を摘む若い女性』  
<http://art.pro.tok2.com/C/Cassatt/Cassatt.html> (確認日: 2018.9.12)

[2018. 9. 27 受理]